

関東大震災後における 浅草オペラの地方公演

早稲田大学人間科学部 杉山千鶴

I. 研究目的及び方法

本研究は、1923年9月1日の関東大震災以降、1924年4月の森歌劇団旗揚げまでの期間において展開された、浅草オペラの歌劇団の地方巡業の意味するものを明らかにすることを目的とする。

当該期間の地方新聞18紙を元に、東京市外における歌劇団の活動を洗い出し年表を作成した。これを元に、①根岸歌劇団団員の足跡と森歌劇団の集結、②震災後の歌劇団の活動、③浅草オペラとは異なった歌劇の動きを概観し考察する。

II. 結果及び考察

(1) 地方巡業

根岸歌劇団の地方巡業は、大変同情が集まって満員の盛況だった(榎本健一「エノケンの青春・喜劇放談」, 明玄書房, 1956)。これは震災の被害を伝える記録映画が各地で封切られ、新聞報道以上にリアルに悲惨さを伝えたことが同情を生み、また震災前の専門誌によるメジャー化と頻繁な地方巡業とがこの下地を作ったことによる。震災後の地方巡業とは、壊滅状態の浅草では公演できない、或いは震災前の巡業の続行という他に、浅草では飽きられつつある浅草オペラも、地方都市であれば、震災以前に撒いた種が芽を吹いて、依然として集客できるという状況を語っている。

(2) 根岸歌劇団団員の足跡

震災当日、根岸歌劇団に所属していたオペラ俳優16名・女優18名について追跡した結果、森歌劇団の旗揚げには俳優11名、女優12名が参加したことが明らかになった。1923年11月に旗揚げした日本歌劇座(同年12月ミカゲ喜歌劇座と改称)には俳優・女優各4名が、根岸歌劇団の地方巡業に参加せず加わっているので、この歌劇団は震災を機に派生してできたものと言える。1924年7月ミカゲ喜歌劇座は浅草に進出し、森歌劇団と競合するが、同年9月で消滅する。その後は同年10月までの短い間ではあるが、森歌劇団の独壇場となる。先行研究の多くが森歌劇団を根岸歌劇団の再来・再結成とするのは、メンバーの他に、このような状況にもよるのである。

(3) 地方巡業の概観

根岸歌劇団以外に活発に巡業した歌劇団は以下の通りである。震災当時、浅草では根岸歌劇団のみが活動していたので、③を除くこれらは、震災前に既に浅草を離れ、地方巡業を展開していたのであり、これを続行したことがわかる。

①東京オペラ座は、根岸歌劇団を脱退した石井

行康の加入後は、石井の考案したボードビルやダンスを多く発表した。②沢モリノ一行は、帝劇歌劇部時代から舞踊を得意とし、また初期にはスターだったという沢モリノの業績を活用してファンを集めた。③日本歌劇座(ミカゲ喜歌劇座)は根岸歌劇団で売り出し中だった相良愛子を看板に、舞踊小品とボードビルを毎回上演した。④東京少女歌劇団は、内地各地の他、満州1ヶ月間、その後京城10日間と長期に及ぶ外地公演を行い、他の歌劇団の追従を許さない、精力的な地方巡業を行った。

森歌劇団の短命さとこれらの活発な巡業から、浅草で飽きられた浅草オペラも、地方ではニーズが高く、観客を集めることができたと言える。

(4) 浅草オペラ以外の歌劇の動き

様々な「少女歌劇」の活動が非常に目立った。これら各地で認められる少女歌劇には、宝塚少女歌劇の影響が感じられる。そして宝塚というメジャーな存在があったからこそ、少女歌劇が受容されたと考えられる。特に大連少女歌劇団は音楽歌劇学校に発展・解消するが、ここでは宝塚に倣ったカリキュラムが組まれている。

また東京少女歌劇団の精力的な巡業も、少女歌劇の観客を作る・育てることに貢献したと言える。東京少女歌劇団は、これを意識した歌劇団が後発しているように、少女歌劇としては宝塚に次ぐ存在であった。宝塚が意識の対象だったのに対し、目の当たりにできるために直接的な刺激剤となり、新しい少女歌劇団の結成を促進したのである。

III. 結論 地方巡業の意味するもの

①根岸歌劇団は震災後、日本歌劇座(ミカゲ喜歌劇座)を派生し、また地方巡業を経て森歌劇団として再結成された。

②震災当時は浅草で活動していなかった歌劇団は、震災前からの継続として精力的な巡業を展開し、いずれも舞踊やボードビルを上演した。

③浅草オペラ以外の流れとしては、宝塚少女歌劇を意識し、また東京少女歌劇団の積極的な巡業に触発されて新規に結成された、多くの少女歌劇団による活動が認められた。

以上3点より、次のことが明らかになった。

浅草において、浅草オペラは、震災以前に根岸歌劇団の独壇場となった時点で凋落しつつあり、震災後もその傾向は続いていた。そのために、歌劇団のほとんどは復興後も浅草に戻らなかったであり、ニーズの高い地方を相変わらず巡業し続け、舞踊やボードビルを紹介すると共に、新たな少女歌劇を生む契機を作ったのである。